Great Expectations におけるピップの語り

隠された暴力性と無意識の自己編纂

横井翔馬

はじめに

『大いなる遺産』は 1860 年から 61 年にかけて連載された小説であり、主人公ピップが過去を回想するという自伝の形式で語られる。この作品は一般的にはビルドゥングスロマンとして受け入れられているが、果たして本当にピップは成長をしていると見做していいのだろうか。今発表は、暴力性の観点からピップの成長を分析し、ピップの暴力性は最初から最後まで発揮されており、彼は自身の暴力性に対して基本的に無自覚であること。次にピップの語りに注目しながら、彼が自伝を編む理由として自己の確立があり、しかしそれには欺瞞が見られること。また作品そのものにおいて、文章と偽造は関連しており、それはピップの自伝においても当てはまることを論じていく。

１，ピップの暴力性ーー復讐成就の能力

ピップは幼少期、周囲の大人たちから肉体や言葉による暴力を受けて育ってきた。中でも、ピップは自身を“Naturally wicious”と決めつける言論に対して反発を抱いてきた。しかしながら、偶然とはいえパンブルチュックにタール水を飲ませることに成功するなど、ピップには無意識に復讐を遂行してしまうという暴力性を有している。また、ハーバートとのボクシングの場面においては、ピップは殴れば殴るほどにより強く殴っている。これは明らかなピップの暴力性の発露である。Moynahan は、オーリックとピップの分身関係を指摘し、オーリックがピップの懲罰的な道具や武器として機能していると述べる。事実オーリックはピップを虐待していたジョー夫人を打ちのめすことで、代理的にピップの姉に対する復讐を果たしていると解釈できる。

また、ピップとマグウィッチの関係性にも注目する。ピップは最初マグウィッチに対して嫌悪感を抱いていたが、彼を生かすために英国脱出の手助けをする。これはピップのマグウィッチに対する冷たい態度の寛解と見做せ、特にマグウィッチを看取る場面は一種の穏やかさを感じさせるものである。しかし、鵜飼は、ピップがオーリックからコンペイソンの偽書作成能力を言われていたにも関わらず、脱出の日を指定するウェミックからの手紙が本物かどうかを確認することを怠ったことに注目をしながら、ピップは無意識のうちにマグウィッチの英国脱出の失敗および彼の死を望んでいたという解釈が可能であると指摘する。

それだけでなく、終盤において、パンブルチュックがオーリックによって強盗に遭い、口に草を詰められた場面は、オーリックがピップの分身として見做される以上、ピップの暴力性がマグウィッチを看取った後も一切減衰していないことの証左となる。

ピップは“Naturally wicious”という言論に反発をするが、実際にはピップは確かな暴力性を有しているのだ。しかしながら、その暴力性には一切の減衰が見られず、作品終盤においても改善されない。こうした自身の暴力性に対して無自覚な語りには、一定の問題があると見做せる。

次の章では、ピップがそもそも何故語るのかを論じていく。そして、その分析とピップの暴力性を絡めて、ピップの語りには欺瞞的側面が見られることを論証する。

２，　他者からの支配・価値観からの脱却のための自己の語り

冒頭のピップの語りは、世界の様相を述べ自分自身の居場所を策定しようするものである。これは「震える束」と自称するピップの自己が不安定であるが故に自分が何者なのかということを探ろうとしているからであり、いわば自己同定のための試みである。しかし、そうした試みは、突然現れたマグウィッチの登場によって失敗する。

ここで、ピップの自己と他者との関係性についてすれば、ピップの自己は他者からの侵食を常に受けていることが分かる。その侵食というのは大きく二つ、「他者の支配下に置かれること」と「他者の価値観の影響下に置かれること」であると考えられ、それぞれマグウィッチとエステラが関係している。ピップはマグウィッチの紳士として扱われなかったことに対する復讐の道具として扱われており、紳士としての教育を受けるためにロンドンへ行ったのもマグウィッチの資本によるものであることを鑑みれば、ピップはマグウィッチの支配下にいるといえる。また、エステラからの影響に関しては、見た目を重視する紳士観をピップが有

していることが挙げられる。ピップはエステラから容姿を詰られたことがきっかけで、外見的素晴らしさを追い求める。遺産相続の見込みを得た際、ピップは真っ先に衣服を仕立てて外見を改善しようとしたことがその証拠である。

作中における紳士観に注目をすれば、外見を重視するか内面を重視するかが問題となっている。コンペイソンは外見だけの似非紳士であり、ハヴィシャムを陥れ、マグウィッチに罪を着せた。一方で、内面を重視するマシューポケットという人物がいる。そして、ピップの紳士観の変遷として、外見から内面へとその視線が変化していることが挙げられる。物語の終盤、ピップはジョーに看病される中で、ジョーの内面に“gentle Christian man”というように紳士の要素を見出す。これは明らかなピップの成長であり、エステラを起因とした外見重視の紳士観からの脱却であると言える。同様のことがマグウィッチとの関係にも言える。ピップの財産相続を放棄するという行動は、マグウィッチの支配からの脱却であると言えるのだ。

ピップは成長をしている。しかしながら、先ほど論述したような暴力性という観点からすれば、彼の語りには問題がある。次の章では、この作品においては至る所に偽造の概念が存在することを述べていく。

３，「文字」と偽証・偽造の関係性

作中では様々な犯罪が登場するが、中でも偽造という犯罪は物語の序盤から常に存在する。ピップがジョー夫人にどんな人間が監獄船にいるのかと聞いた際に、彼女が挙げた犯罪の中に偽造が存在する。またジャガーズの事務所の石膏像の一つは遺言書を偽造した男の顔である。Jordan は「書くこと」と偽造の関係性に注目をしながら、ピップの自伝も偽造されていると分析する。つまりは、ピップは学を身につけることで、偽造の世界へと足を踏み入れてしまったのである。

しかしながら、そうした偽造の世界に染まらない方法が存在する。それはそうした世界から隔絶された自身の世界を構築することである。それを実行しているのがウェミックである。彼の自宅の周りには濠があり、そこには橋がある。そしてウェミックは自宅に帰れば橋を上げることで外と自宅を遮断する。これはウェミックなりの自己を保持する手段と見做せる。文章を取り扱う環境で働き、ジャガーズの直接の影響下という偽造や欺瞞の世界の真っ只中にいながらにして、彼がそれらと一定の距離をおいて人情ある自己を保つことが出来ているのは、そのようにして自分の世界を確保していたからである。しかし、ピップはそうしたことをしていなかった。そのため、ピップは偽造の世界に足を踏み入れたままになっているのである。

これまでに述べてきたことを踏まえると、『大いなる遺産』はピップの自伝であり、自分の人生を書き上げるという行為の産物であることが窺えるが、その一方で、ピップは偽造の世界に足を踏み入れており、その影響は彼の自伝にも及んでいる。自身の物語を語るということは、恣意的にも無意識的にも編纂をすることであり、自己正当化に陥ってしまう危険性が常に存在するが、まさにピップはそれに陥っているのだ。

おわりに

『大いなる遺産』は主人公の成長を直線的に描く単純なビルドュングスロマンではない。成長しきれていないのに自分は成長していると誤認識している主人公を描くことで、自伝という半生の振り返りにおいてですら自分自身の心理を奥底まで掘り下げることの難しさ、自身にとって都合の悪い部分から目を背けてしまう欺瞞、語り手がそれらに気付けない悲劇性、こうした自己形成における様々な問題を掘り下げた作品なのである。

参考文献

Daleski, H. M. Dickens and the Art of Analogy. Faber and Faber, 1970.

Dickens, Charles. Great Expectations. 1860-61. Edited with notes by Charlotte Mitchell, with an introduction by David Trotter, Penguin Books, 1996.

Jordan, John O. “The Medium of Great Expectations” Dickens Studies Annual, vol. 11, 1983, pp. 73–88.

Leavis, F. R. and Q. D. “How We Must Read Great Expectations” Dickens the Novelist. Chatto and Windus, 1970, pp. 277-331.

Moynahan, Julian. “The Hero's Guilt: The Case of Great Expectations” Essays in Criricism 10 (1960), pp. 60-79.

Tambling, Jeremy. “Prison-Bound: Dickens and Foucault” Great Expectations (New Casebooks). Edited by Roger D. Sell, Macmillan Press, 1994, pp. 123-42.

鵜飼信光「マグウィッチ殺しの願望」『背表紙キャサリン・アーンショー――イギリス小説における自己と外部』九州大学出版, 2013, pp. 65-94.